

待降節第2主日 説教 「主が近づきたいと思う人々」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020年12月6日

イザヤ書 59:12~20、マタイによる福音書 13:53~58

アドヴェントクランツの二つ目のローソクに火が灯され、また一つ恵みの時が近づいたことを思います。そこで、教会の祝祭日を迎えるに当たって、毎回皆さんに申し上げていることは、心静かに祈りの中に、ということです。それは、主を待ち望むということ、主の御苦しみを覚え、十字架の歩みを共にすること、そして、聖霊を待ち望み、祈りの中に交わりに止まるということ、私たちの信仰を支えるこれらの出来事は、巷の喧噪を離れ、祈りの中に与えられたものだからです。そして、私たちはそこで知らされます。主が私たちと共にいまし、私たちと共に歩んでくださっていると。ですから、私たちの生涯はこの幸いと恵みの中に置かれているがゆえに、支えられ、守られもするのです。それゆえ、私たちはそれを知らせる信仰をこれまで大切にしてきたし、また、大切にしているのです。しかし、この日与えられているそれぞれの御言葉は、それだけにまた、私たちの心に暗い影を落とすようにも思うのです。それは、そこに私たちが見るものが、神の民の犯した取り返しのつかない過ちであり、また、主イエスと一番近いところに生きたであろう人々の失敗であるからです。つまり、信じているがゆえに生じる信仰の陰りを感じさせられるということです。

ですから、私たちの目の前にある人々の姿は私たち喜びをもたらすことはありません。信仰ゆえに新たな苦しみを背負わされ、特に、主の恵みと平安に生きていと自負する者には、地獄の釜の蓋が開いたかのような錯覚を与えることにもなるのでしょうか。従って、今日のそれぞれの御言葉は、クリスマスにポジティブな気持ちで待ち望みたい者には、これほど忌々しい御言葉はないのではないでしょう。ですから、ここで語られている夢も希望もない出来事は、もしかしたら、誰一人として幸せにすることはないのかもしれない。そのため、それを子どもたちにどう伝えればいいのかと、多くの親たち大人たちを悩ませたりもするのでしょう。ですから、そこでもし私たちが、それでもというところで何か気の

利いたことを語るとしたら、それは、私たちの信仰が子供じみた、子供だましのものではないということです。しかし、夢や希望を語ることでできないものを、人は人生をかけてどうして信じることができるのでしょうか。また、そもそものところで言えば、イエス様は弟子たちを叱りつけ、ご自分の居るところに幼子を招いたわけですから、子供だまし、子供じみたという言葉は、私たちの信仰を語る上ではふさわしい言葉ではありません。しかし、それにしてもどうしてなのでしょう。神の家族と呼ばれているイスラエルと、幼い頃よりのイエス様を見知った人々の、躓きでしかないこれらの情報を、御言葉はどうして、時代を隔て生きる私たちにわざわざ伝えようとするのか。しかも、それをわざわざクリスマスを迎えようとするこの時にです。ですから、こうした類いの話は余り聞きたくないと、正直、誰もがそう思うことなのでしょう。第一、私たちの社会通念では、個々の事情に踏み込まないというのが一つの常識でもあるわけです。ですから、それを堂々とこのように伝えられていることには、正直、辟易すると、かつてその正直な気持ちをお伝えくださった方もおりました。ただ、快く思わないのは、私にそう訴えた方だけではありません。私もそうですし、恐らくは皆さんもそうでしょう。しかし、ここで私たちがある種の不快感を覚えるのは、夢も希望もないということが、その本当の理由ではないようにも思うのです。

私たちは、ここに記されていることその当事者ではありません。ですから、当事者のように御言葉聞くことはありません。けれども、どうしてそれが私たちの気に触るのか。それは、御言葉が語るところが、私たちの心の内にしまい込んである、誰にも触れて欲しくないと思うものに触れるからです。そして、私たちが思うこの触れて欲しくないものとは、信仰的にも聖書的にも、私たちが好ましくないと思っているもので、ですから、信仰的、聖書的という言葉好む人々には、そういう私たちに自分の罪と向き合わせる上での格好の材料を提供するこ

ともなるのでしょうか。そして、その人たちがそう考えることは正しいことでもありますし、特に、御子の誕生を待ち望むこの時、御言葉が「主は贖う者として、シオンに来られる。ヤコブの中の罪を悔いる者のもとに来ると、主は言われる」と語っているわけですから、私たちが好ましくはないと思うものが正されることは、聖書的にも信仰的にも正しいことだとも言えるのでしょうか。御子の誕生というハレの場に、身を整えずして臨んでいいはずはないからです。

しかし、聖書の御言葉は私たちだけに語られているわけではないのです。ですから、それを信仰信仰と、錦の御旗を振り上げるように身を正すことを人に求めたとしたら、どうなるのでしょうか。恐らくは、私は結構です。ご勘弁を、と、そう言われかねないことにもなりましょうし、それでもと、熱心に真剣に人にそれを求めたとしたら、勧める本人はそれでいいのでしょうか。けれども、勧められた方はどうでしょうか、恐らくは、それで良好な関係を保つことは難しいのではないのでしょうか。けれども、その反対にまた思うのです。御言葉を信じる私たちは、誰もが受け入れやすい、ある意味での調子いい部分だけで神様を信じているのか、そういう直ぐにメッキがハゲてしまうような安っぽいことを聖書の御言葉は私たちに語り続けてきたのか、そんなふうにも思うのです。そして、もちろんそうではありません。ならば、私たち教会が聖書の御言葉を通して現してきたこと、つまり、それが私たちの信仰でもあります。私たちが信仰が直ぐにメッキがハゲるような安っぽいものではないと、私たちはそれをどのように言葉にすればいいのでしょうか。

そこで、私たちが先ず言えることは、信仰をもって生きる私たちの人生には、御言葉が示すように、間違いがあり、失敗があるということです。ですから、先ずはこのことを素直に受け止めなければならないのですが、それは、私たちの人生が、神様と神様が語る御言葉から切り離されたところには置かれていないからです。それゆえ、また、御言葉は私たちの心のうずきの理由ともなるのですが、ただし、それを理由に、自らのその人生が、御心に背くような間違いだらけ、失敗だらけであっていいということにはなりません。しかも、御言葉が「御前に、私たちの背きの罪は重く、私たち自身の

罪が不利な証言をする。背きの罪は私たちと共にあり、私たちは自分の咎を知っている」と語り、しかも、私たちにはそれが分かっているわけですから、過ちと失敗は、やはり、私たち自身のその手で遠ざけねばならないのでしょうか。つまり、「正義は退き、恵みの業は遠くに立つ」と御言葉が語る状況は何としても避けねばならないということです。

しかし、それが分かりながらも、過ちと失敗を繰り返してきたのが神の民イスラエルでありました。それゆえ、イスラエルの人々は、私たちと同じように自らの罪と向き合い、まるで一人相撲でも取るかのように、この罪ゆえに苦しむことにもなったのです。けれども、そのイスラエルに神様が約束されたものがメシア、救い主の到来でありました。そして、イザヤの言葉からおよそ500年後に、神様は御子イエス様を救い主としてこの世にお遣わしになり、その約束を実現なさったのです。ところが、そのイエス様が神様の約束を信じ歩み続けたイスラエルの民に、しかも、ここでは、それが、御子イエス様が幼き日より共に暮らしてきた故郷ナザレの人々でもありましたが、その人々に向かってイエス様が語ったことが「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」というこの一言であったのです。

ただ、私たちがこうして信仰へと招き入れられたのは、イエス様のこの言葉があったからでもあります。そういう意味で、私たちの信仰は、イエス様以前の古いものとは異なり、イエス様を信じているがゆえの新しさに生きているとも言えるのです。それゆえ、私たちは、この新しさゆえに日々御心によって新たに変わられていくことにもなるのですが、従って、この新たに変わられるということが、イエス様を信じる私たちの定めだとも言えるのでしょうか。そして、それは、事実、その通りだと思います。私自身もそうですし、皆さんご自身もそうです。そのことを間違いないと証しするのが、こうして信仰をもって生きる私たちだからです。ですから、私たちの人生とはつまり、信仰ゆえに新たにされた我が身を証言する生涯だと言えるのでしょうか。それゆえ、もし私たちがそれを避けるようなことがあれば、私たちの人生は、それこそ御心にふさわしく終わりを迎えることもないのでしょう。しかし、そうであるからこそまた、私たちは思われるの

です。三つの時の自分と今の自分とを比べた場合には、それがまったく同じでないのは明らかなことでもあります。けれども、三つ子の魂百までと言われるように、私自身のことを申し上げ恐縮ですが、三つの頃の自分と今の自分とを比べた場合、その違いはさほど大きくはないようにも思うのです。ましてや、三つの頃から長く私たちのことを見てきた人たちにとってはどうなのでしょう。

親にとっては、三つの子どもも成長し立派に活躍している子どもも、その本質的な部分での受け止め方に違いはありません。まただから、親に向かって子どもが偉そうな口を利こうものなら、親もまた腹が立つ、それは、親と子の関係性がそれだけ近いものでもあるからです。そして、この近さは、私たちが自ら選び取ったものではありません。神様が私たちに与えてくださったものであり、それゆえ、私たちが、自分の考えや意志によって、変えることは許されることはありません。それは、この近さゆえに私たちの今があるのは間違いのないことだからです。ですから、この近い関係性が私たちにとって悪いものであろうはずもなく、しかし、この本来「よい」はずのものが、御言葉にもあるように、逆の意味で作用することがあるのです。イエス様がこの時経験されたことは、まさに、それゆえのことでもあります。このことはつまり、私たちに安らぎを与え、新たに作る、この、人と人との近さが、この近さを誤解するがゆえにまた、人の目を曇らせることがあるということです。そして、それは、イエス様の生まれ故郷であるナザレの人々が、イエス様のことをいつまでも三つのイエスちゃんのままで見ていたからでもあります。それゆえ、イエス様の成長、変化、その新しさを、人々はささやかな安らぎを破るものとして忌み嫌ったのです。故郷の人々はイエス様のことを厄介者、目障りな奴と、そう思ったのはそれゆえのことでもあります。しかし、そう思ったのは故郷ナザレの人々だけではありませんでした。聖家族と呼ばれているイエス様の家族も、また、神様によって特別に選ばれた神の民イスラエルの人々も、故郷ナザレの人々がここで「我々と一緒に住んでいるではないか」と語るこの近さゆえに、イエス様との近い関わりにあったすべての人々が、イエス様との近さを誤解

し、それゆえにまた、イエス様に躓いたのです。

ただ、私たちが今、信仰ゆえにイエス様の近くにいることができるのは、それらの人々の躓きがあればこそのもではありません。つまり、その近さゆえにイエス様に躓き、三つのイエスちゃんとの関係性に終わりが告げられたがゆえに、福音はその後の広がりを持つに至ったということです。それゆえ、私たちに今与えられている、イエス様が共にいますがゆえの安らぎは、私たちが日々新たなものとし、御心にふさわしく私たちを変えていくのですが、ただし、それは、私たちだから、ということではありません。イエス様のお弟子さん始め、その聖家族と言われている人々が、ここで躓けばこそやがて変えられていったように、躓きはそういう意味で恵みの出来事だとも言えるのでしょう。それは、イエス様の近くに共にいて、この近さを誤解したとしても、進むべき道は閉ざされることはないからです。ただ、それだけにまた、躓きは辛いものでもあるのでしょう。なぜなら、それは無傷で終わるものではないからです。

従って、躓きがそのままでは終わらないことが分かっている、そこでもし神様とイエス様が私たちにこの躓きを与えたとしたら、私たちは、何を思い、何を考えるのでしょうか。つまり、その時、私たちは、イエス様のことを近いと、イエス様ゆえに神様が近いと、そう心の底から思うことができるのかということなのです。また、さらに申せば、先ほどから申し上げている新しさもそうです。新しさとは、私たちが望む新しさだけではありません。望まぬ新しさも主の恵みであり、まただから、イエス様が三つのままのイエスちゃんではなかったように、私たちに与えられる信仰ゆえの新しさを、私たちは神様からの恵みとして受け止めることになるのです。ですから、この新しさを恵みとして受け止める私たちは、その生涯を通して日々新たにされ、それゆえ、私たちの人生は、主の御心のままに豊かなものとされるのです。

しかし、私がこのように申し上げても、もしかしたら、皆さんは、それでも「自分は違う」、更に言えば、「自分だけは違う」とそう思うのかもしれない。そして、そう仰る理由は、「自分は罪人であり、それゆえ、イエス様との近さを、自分は喜ぶことができない」とい

うことなのでしょう。ただ、私から言わせていただければ、皆さんはもっと胸を張っていいと思いますし、そうすべきであると思うのです。けれども、それができないのはどうしてなのか。それは、新しくされていることの実感が伴わないからであり、つまり、故郷の人々がイエス様のことを三つのままのイエスちゃんに見なしたように、新たにされている自分自身のことをそれと同じように見てしまっているということです。けれども、そのように自分自身のことを思うことは、自分で自分を裁くことに他なりません。けれども、そう思うことが間違っていると私は言いたいわけではありません。なぜなら、昨日の自分と今日の自分とを比べ、明らかにここが変わった、ここが新しくなったと言えるほど、私たちは図々しくはないからです。しかも、三つ子の魂百までと言われるように、その姿形が変わったとしても、御言葉が語る私たちの罪は完全に取除かれたわけではありません。そこで、それを取り除くためには、イエス様がそうであるように、愛をもって生きなければと、そう思ったりもするのでしょう。けれども、自分自身を非の打ち所のないものにするためのそうした行動は、その言葉の美しさからはほど遠いところに自分を追いやり、返って、息苦しさを感ぜさせたりもするので。それは、頑張っても頑張っても、人を愛し、自分がいい人になったという、そういう実感が湧いてこないからです。そのためにまた、自分を許せず、自分自身の信仰を裁くことにもなる。けれども、それは、愛するということを私たちが誤解しているからです。なぜなら、愛することは、私たちの罪、矛盾、欠けの多さやその心根の卑しさ、そういう自分自身が受け入れることのできない一切合切の好ましくないものを取り除く、魔法のようなものではないからです。

では、私たちはどうしたら自分を離れ、御心をありのままに受け止められるようになるのでしょうか。ただ、イエス様の近くにいた人たちがそうであったように、自分を離れ、イエス様の近くにいたことの実感を持つことはそうそう簡単なことではありません。罪深い自分を離れることができず、その意に反して、自分が一番いたくはないと思うところにいつまでも止まろうとするか、あるいは、望まぬところに自分自身を追いやってしまうものでもあるからです。そして、それ

は、私たちがそういう自分に終わりを告げ、新しい一步を踏み出す勇気が持てないからでもあります。そのためにまた、これは理屈に合わないことですが、この自分が一番いたくはないと思うところに居続けてしまうのです。ですから、そこで私たちの思うことは、今ここにイエス様にいて欲しいということでもありませんがけれども、そこで最も深刻な問題は、いて欲しいと願いながら、イエス様は自分とは共にいてくださらないと、私たちがそう思っているということです。けれども、果たして本当にそうなのでしょうか。

御言葉が私たちに告げ知らせてくれていることは、罪ゆえに、本当は自分がいたくはないと思込んでいるところにも、神様は共にいてくださっているということです。なぜなら、そこに神様はイエス様をお遣わしくくださったからです。今日のそれぞれの御言葉が教えてくれていることはこのことであり、このことはつまり、福音がこうして告げ広められたのは、人が生み出した高邁な理想からではなく、躓くしかない人としての低さに神様ご自身が寄り添ってくださったがゆえのものだということです。ですから、ある人が、福音は「太郎、次郎、三郎の中から起こる」と言っているはそのためです。自分自身が変化を実感できずとも、イエス様の居るところに自分も同じように共にいると、このことが分かっているところでは、三つの子どもがいつの間にか成長しているように、私たちは実感が伴わずとも、日々必ず新たにされています。そして、それは、イエス様が三つであろうが、八つであろうが、33歳であろうが、イエス様が神様にとっての愛する独り子であるように、日々新たにされている私たちも、三つの時も、八つの時も、それこそ、100歳の時も、神様とイエス様とのこの近さゆえにいつまでも神様に愛されている者だからです。まただから、私たちは何かに躓き、一つのことが終わったとしても、私たちを新たにすべく次へと導かれる神様の御心にすべてを委ねることができるのです。それは、私たちがイエス様とも神様とも近くにあるからです。だから、未熟で幼い私たちは、自分が気がつかないような形で、日々、新たにされていくのです。主を待ち望みつつ、この新たにされる喜びを共々に味わい知る者でありたいと願います。祈りましょう。